



2005年3月1日

通巻1007号

発行：金沢大学教職員組合執行委員会
〒920-1192 金沢市角間町
TEL076-262-6009 角間内線2105
E-MAIL kanazawa@ku-union.org



金沢大学版 地球の歩き方

金沢大学版「地球の歩き方」 《アメリカ・ワシントンDC》

武居 渡 (教育学部)

昨年11月6日から14日まで、科研の出張でアメリカ、ワシントンDCに行く機会を得ました。ワシントンDCには、世界で最初に設立されたろう者のための高等教育機関、ギャローデット大学(Gallaudet University)があります。この大学は、修士課程や博士課程も備えた4年制の総合大学であり、多くの学生が学んでいます。ただ、普通の大学と違うのは、学生のほとんどがろう者なのです。学部はろう者しか入学できません。アメリカだけでなく世界中のろう者が、ギャローデット大学に入學し、文学や哲学から物理学、化学まで、様々な分野を学んでいます。もちろん、この大学では講義はすべて手話で行われ、大学教員の中には、自分自身も聞こえない人が多くいます。手話ができ、ろう者と手話で話ができない教員は、この大学では働けません。外国からギャローデット大学に留学した学生は、まず1年間アメリカ手話を学ぶコースに入り、講義を理解できるに足る手話力を身につけてから、学部に入學することになります。大学院には、聞こえる学生も入学できます。ただし、講義はすべて手話で行われ、ゼミや指導も手話が必須なので、アメリカ手話ができるということが大学院入學の前提条件になります。また、この大学は、大学附属のろう学校を有しており、小学校、中・高等学校が大学敷地内にあり、ワシントン近郊にいるろう児がここで学んでいます。

この大学は、ろう者のための大学として1864年に設立されました。日本ではまだ、明治維新直前、学制も発布されていない時代のことです。ギャローデットという名前は、アメリカに初めてろう教育を持ち込んだ Thomas Hopkins Gallaudet から来ており、彼はフランスのパリろう学校で手話を用いた指導法を学び、パリろう学校の教え子であったクレールを連れて帰国し、アメリカ初のろう学校を作ったのです。Thomas Hopkins Gallaudetの息子、Edward Miner Gallaudetが、初代の学長を務めたのがこのGallaudet Universityになります(写真1)。

さて、前置きが長くなりましたが、私はこのギャローデット大学附属小学校を訪問し、ろう児に対する手話指導プログラムや読み書きの指導方法について、向こうの小学校の先生と議論したり、教材について調査したりするために、行ってきました。私は、小学部1年生のクラスに入らせてもらい、日本について簡単な授業をし、先生や子どもたちと楽しいひとときを過ごすことができました(写真2)。

ところが、このギャローデット大学は、異文化を学び、体験するには格好の場だと実感しました。アメリカ文化を学ぶ場ではなく、ろう者の文化を学ぶ場と言う意味で・・・。というのも、この大学にいる人たちのほとんどがろう者なのです。学生はもちろんですが、大学や附属学校の教員も半数がろう者です。また、売店の店員や清掃員、学内にあるホテルのフロントやホテルレストランのウェイトレス、図書館職員など、学内で働く人もほとんどがろう者なのです。



写真1



写真2



写真3



写真4

日本の手話はわかっても、アメリカ手話がわからない私は、この中では間違いなく少数派であり、支援される人なのです。この大学では、通訳はろう者ではなく、手話のわからない聴者につきます。食堂では、20メートルくらい離れた2人の人が、午後の予定について互いに手話で話をしています。聴者が音声言語で同じことをしようとしたら、回りの人間に「うるさい」と注意されるでしょう。物理的な音としてはわずかな笑い声が聞こえるだけの食堂ですが、そこには手話の花があちこちに咲いており、実に視覚的にぎやかな空間でした。この中で、聴者である私は間違いなく少数派であり、手話で楽しそうに話す集団に入りたくても入れない、まさにろう文化の存在をさまざまと見せつけられたのでした。

ギャローデット大学は、ワシントンD.C.のなかでも治安があまりよくないところに建っています。ちょっと学外に散歩、というわけにはいかないため、駅から学内までは、大学所有のバスが15分おきに出ており、学内ですべての用がたせるよう、食堂から売店、ホテルまですべてのものがそろっています(写真3)。

この大学敷地内は、まさにろう者の国であり、私にとっては異文化でした。しかし、そこで働いたり学んだりするろう者が、全く聴者と関わらないわけではありません。大学を一步出ると、そこは聴者があふれる社会になります。ギャローデット大学で培ったろう者としての自信と誇り、そして彼らの言語であるアメリカ手話を使いながら、聴者とかかわり、聴者の中で誇り高く生きていくのです。

障害児教育という分野にいると、つい障害のある子どもに教育を施すことによって力をつけ、社会で自立的に生きていくようにすることに重点を置いてしまいかがちです。のために、例えば聴覚障害児教育で言えば、聴者にも伝わるよう発音を練習し、日本語を学びます。それはもちろん重要なことかもしれません、彼らが社会で生きていくのに本当に必要なのは、自分自身に対する自信と誇りではないでしょうか。私は、彼らの文化や行動様式をもっと学びたいという思いを強くして帰国しました(写真4)。

11月のアメリカは、朝晩になると気温は10℃を下回り、非常に寒いのですが、防寒対策が甘かったため、向こうでは凍える思いをしました。また、食事は、どこがおいしいのか、レストランについては全く予習していかなかったため、入る店に入る店ごとく失敗し、量が多く、おいしくない料理の連続に、辟易しました、「おいしくなくて、量が多い」と言うのは「おいしくなくて、量がない」よりもたちが悪いと言うことを痛感しました。大学訪問以外は散々だったのですが、それを差し引いても、このアメリカ出張は私にとって忘れられないものになり、いろいろ考える機会をもらいました。興味のある方はぜひ、ギャローデット大学のホームページをご覧ください(写真5)。

ギャローデット大学ホームページ <http://www.gallaudet.edu/>



写真5

「ゆにゆに」を読んでのご意見をお寄せください！
今後の紙面の充実がはかれますよう、みなさんのご協力をよろしくお願ひします。
「ゆにゆに」は毎号組合ホームページ <http://www.ku-union.org/> に掲載しています。



音楽の小窓

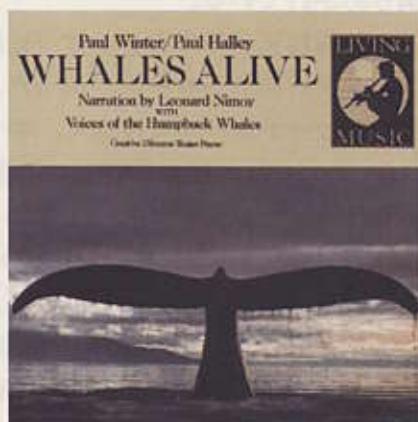
10年以上前、ウィンダムヒルというレーベルを中心に、いわゆる New Age Music なる音楽が巷でよく聴かれるようになった。ジョージ・ウィンストンのピアノ曲は、それと意識しなくても聴いたことのある人は多いはずだ。今でも時々CMなどで使われることがある。インスツルメンツ中心の、ジャズともクラシックともポピュラーともカテゴリー分けしづらい音楽で、透明感のある癒し系の音楽である。バブル景気が末期を迎え、疲労感と不安感が広がりつつあった頃、多くの人が「癒し」を求めていた。「聴かせる」よりも「癒す」ことを目的にした音楽CDが必ずCDショップに置いてあるが、そのような傾向も New Age Music 以後のことのように思う。

僕がポール・ウィンターの音楽に出会ったのも、そんな頃だった。何の予備知識も無く、たまたまレンタルCDショップで借りて聴いたのだが、広大な空間を感じさせる音楽に感銘し、それ以来、彼のアルバムを聴くのが楽しみになった。日本でも一時期、生命保険か何かのCMで、彼がソプラノサックスをクジラに向かって演奏していたり、グランドキャニオンの渓谷に向かって演奏していたりする姿が出ていたので、覚えている人もいるだろう。当時は、流行の New Age Music の一種かなとも思っていたが、それはこちらの勝手な思いこみだった。彼自身は流行とはあまり関係のないところにいる非常にキャリアの長いミュージシャンである。1960年代初め、大学在学中にジャズミュージシャンとしてデビューし、そこで結成したジャズ・セクステットが、ケネディ大統領に招かれてホワイトハウスで演奏した最初のジャズ・グループとなっている。60年代後半から、世界各地の音楽だけでなく、クジラの歌やオオカミの遠吠えなど、自然界の音を取り入れるようになり、今なお独自の音楽世界を広げている。

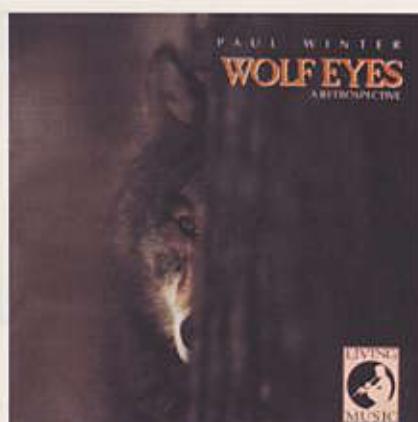
ポール・ウィンターは、生き物や自然と共に演することが多い。冷めた見方をすれば、自然音をサンプリングしているだけとの見方もできるが、生き物の声を利用するのではなく、それと対話しようとする姿勢は「共演」という言葉がぴったりのように思う。動物と共に演したアルバムは少なくないが、ここではザトウクジラとの共演のアルバム「Whales Alive(鯨の詩)」をお勧めしたい。大げさな言い方だが、「歌う」ことの原型がここにはあるように思う。ソプラノサックスとバイオリンの優しい響きとザトウクジラの歌の共演は、一時的な「癒し」以上に大きな世界を体験させてくれる。彼自身のレーベルである Living Music からは「Songs of the Humpback Whale」というアルバムも出ているがこちらは本当にクジラの歌声だけである。クジラの声だけでも退屈しないという人にはお勧めしたい。クジラだけではどうも・・・という方には、80年代の曲からウィンター氏自らが選んだベストアルバムの「Wolf Eyes(狼の眼差し)」をお勧めする。Sun Singer という

ポール・ウィンター (Paul Winter)

坂本 二郎 (工学部)



Paul Winter & Paul Halley, Whales Alive, Living Music



Paul Winter, Wolf Eyes, Living Music



Paul Winter Consort, Spanish Angel, Living Music

曲の冒頭で聴けるソプラノサックスの響きは、それ自身が生き物の歌のようで美しい。ちなみに、Sun Singer というのは、ストックホルムの旧国会議事堂前にある銅像で、武器を捨てて太陽を抱擁するという平和のメッセージがこめられているそうである。三枚目のお勧めとしては、僕自身の好みで「Spanish Angel」を挙げておきたい。これは、彼のグループが92年にスペインツアーをした時のライブアルバムである。音楽を通じた環境保護活動や、それを意識させる彼のアルバムのタイトルなどにより、つい先入観を持つて聴くことが多いのだが、「Spanish Angel」ではそういったことを意識せず、ごく自然体で音楽そのものを楽しむことができる。特にフルート奏者であるロンド・ラーソンの演奏は、活き活きとして音楽の喜びに満ちあふれている。

十年前にアメリカのアイオワに滞在していた時期があり、その時に、たまたま州都のデモインでポール・ウィンターのコンサートがあった。滞在先からは少々遠かったが、泊まりがけで家内と聴きに行った。場所はコンサートホールではなく、やや広めではあるが普通のカトリック教会であった。とてもアットホームなコンサートで、「狼の眼差し」の演奏では、観客が狼のパートを担当した。僕ら夫婦も大いに遠吠えさせてもらった。一番印象に残っているのは、教会の聖歌隊との共演があり、聖歌隊の人達(年齢も人種もいろいろ)が楽しそうに身体を動かしながら、にこやかに歌っていた光景である。この光景を思い出すたびに、「音楽は楽しい」という当たり前のことを、とても大事に感じるのである。

毎年、12月にニューヨークの聖ヨハネ大聖堂でポール・ウィンター・コンサートによる冬至の祝宴コンサート「Winter Solstice Celebration」が行われている。前々から、是非とも一度聴きに行きたいと思っているのだが、未だに望みは果たせずにいる。冬至の頃にニューヨークに行く機会のある方は、是非、聴きに行ってほしい。



モーターサイクル・ダイアリーズ

監督：ウォルター・サレス

出演：ガエル・ガルシア・ベルナル、ロドリゴ・デ・ラ・セルナ、ミア・マエストロ

写真：映画の公式HPより転載

橋 洋平（附属図書館）

アルゼンチン出身で後にキューバ革命などに影響を与えた革命家チェ・ゲバラの若き日の貧乏旅行を描いたドキュメンタリー風の作品。この旅行は、古いオートバイにチェと友人の2人で乗り、南米大陸の太平洋岸を縦断しようという無謀かつスケールの大きなものだった。単なる思い付きで始めた旅行だったが、南米各地の庶民の生活に接し、生の社会問題に触れるにつれて、2人は変わっていく。

特にオートバイを捨てて(まさに乗り潰したという感じ)、ヒッチハイクに切り替えた後のエピソードが印象的である。ペルーの銅山での労働者との出会い(悲しく暗い目が印象的)、ハンセン病の施設でボランティアとして過ごす数日間のエピソードなど、南米社会のリアルな日常が虚飾なしに描かれる。演技と演出を越えたような素晴らしい映像が続く。

旅行後半のアマゾン河畔のハンセン病施設では、チェの“誰からも愛される”魅力が存分に發揮される。彼は社会的に差別を受けている人たちとも自然に接する。人種の違いに捉われない統一された南米を作らないといけない、という思いが湧き起こり、それが彼の体の中にみなぎる。施設を離れる前夜、彼は夜のアマゾン川を泳いで渡るという無謀な挑戦をする(チェが喘息持ちだということが伏線)。この部分がこの映画のクライマックスだった。チェの理想に向かうエネルギーが行動となって





表現されていた。

この挑戦は成功し、川の両岸から応援する群衆は大喜びする。チェはこの瞬間に英雄となった。彼の革命家としての後半生を予言するような感動的なシーンだった。チェを演じたガエル・ガルシア・ベルナルの演技は素晴らしかった。誰からも愛される純粋で正直なキャラクターを、目と体全体で表現していた。

この作品では、こういったエピソードを大げさな演出を加えずに描いていた。音楽は一切なく、映像もホームビデオ風なので、映画を見ている方も次第に一緒に旅行をしているような感覚に陥ってくる。旅行前半の“若き日の武勇伝”といったエピソードの積み重ねの上に後半の感動的なエピソードがさらに重なることで、見ている方も2人の旅行者と同じ疲労感と感動を得る。そして、時折はさみこまれる、素朴なユーモアに接した時、映画の登場人物同様にホッとする。

この作品には、マチュピチュ、バルバライソ、リマといった歴史や地理の教科書に載っているような地名がいくつか出てきた。映画の中で見ると、教科書では分からぬ南米の風土が生き生きと伝わってきた。また、映画の至るところで出てくるダンス・シーンも南米の国民性を感じさせてくれるものだった。タンゴとマンボの違いも分からないような日本人にとっても、チェの「ダンス下手」は理解できた。これがまた微笑ましいユーモアを生んでいた。

チェ・ゲバラは、後年、世界中で活躍する革命家となる。共産主義の是非は別として、人種にこだわらない統一された理想郷としての南米を作りたいという彼のメッセージは現在も生きている。この作品はチェ・ゲバラの若き日の物語であると同時に、いつの時代の若者にも共通する理想に向かうエネルギーを旅行という形で鮮やかに描き出した素晴らしい作品だった。



(追記) “チェ”というのは、アルゼンチンで名前を知らない友人を呼ぶ時の習慣である。それがそのままゲバラの名前の一部となったものである。このチェ・ゲバラは、映画及びミュージカルの「エヴィータ」では、ただの「チェ」として登場する。映画版ではアントニオ・バンデラスがラテンのムードを強烈に感じさせる、魅力的なチェを演じ、歌っている。

(追記) この映画のタイトル中の「モーターサイクル」という言葉は、旅行途中でバイクが捨てられてしまったことを考えると正確ではないのだが、この旅行記は一般的にこの名で知られているようである。日本語では角川文庫で読むことができる。



映画の公式HP：http://www.herald.co.jp/official/m_cycle_diaries/index.shtml

製作年：2004年／製作国：イギリス=アメリカ合作／原作：エルネスト・チェ・ゲバラ「モーターサイクル南米旅行日記」（現代企画室刊）

提 供：日本ヘラルド映画、アミューズソフトエンタテインメント

後 援：キューバ共和国大使館／サントラ：ユニバーサル・クラシックス

カラ－／2時間7分／7巻／3453m／ビスタサイズ／ドルビーSRD／字幕翻訳：林 完治

ああすめの♪

ちょっといいはお店

焼肉酒場・炭火七輪「情熱本舗」
金沢市片町2-9-13(香林坊109裏)
電話 076-261-5010



焼肉酒場・炭火七輪「情熱本舗」

吉川 一義 (教育学部)

香林坊109裏、旧映画館通り左横の小道を入ってすぐの建物内にあります。既にご存知の方も多いのではないでしょうか。この界隈も随分と様変わりしましたね。映画館も無くなり駐車場ができていました。写真の看板を見つけたら、もうすぐです。お店に入ると右手にはカウンター席、左手に座敷席があり、物静かで精悍な様子のご店主(新出さん)が声を掛けてくれます。

学生時代から1日1食で過ごしてきた私ですので、食を楽しむ・違いがわかる等、食へのこだわりも特に無く、

食するものは大抵旨いと思ってきました。しかし、ここでの焼肉は実に旨い。感心しました。焼物では肉・海鮮・野菜、加えて、情熱飯・情熱うどんのオリジナルメニューがあり、おすすめ品には、赤い星印(★)が付されています。中でも特に、ネギタン(写真下左の中央)は衝撃的でした。まずは、タン上の山盛りネギに圧倒され、このネギを落とすことなく七輪にのせる、片面が焼けたら食べるのです。箸を拝げて構え、焼き網とタンの間に上手く滑り込ませます。そして、タンの両端を持ち上げてネギを包み込み、一口で食べる。

後はご想像にお任せします。ネギにも調理が施されているようで、タンとネギの組み合わせは味も量も絶妙です。酒は、焼酎の種類が豊富です。焼酎の好きな人には、楽しみなお店です。店の雰囲気は、焼肉屋さんにありがちな騒々しさや忙しない雰囲気とは異なり、七輪を使ってゆっくり焼く、静かな時間が流れています。また、私の世代からその上の世代の方には、懐かしく思い出される曲が次々と流れているのです。この様に書くと、中堅から年配の方が多い店と思われますが、若い世代の方も多く幅広い年代層に愛されているお店だと思います。



金沢市片町2-9-13 (香林坊109裏・悟空ビル1F) TEL: 076-261-5010

営業時間: 18:00~翌日6:00

定休日: 毎週日曜日

○○○編集後記○○○

今号も豊かな内容になりました。執筆の方々に、お礼申し上げます。

断りきれずに買ったチケットが契機となり、学生の演奏会にはまめに足を運んでいます。日頃、学生には頼りなさを感じていたのですが、彼らの表現に触れて“凄い力”を知りました。生活には色々な局面がありますが、実にうまく楽しんでいます。ゼミ中に先輩の先生が“遊びは人生を豊かにする”と言われました。学生にはとても印象深い言葉だったようです。その横で私は“この言葉を悪用しないように”と苦笑しています。武居さん(今号2P)が言うように“予習”も大切ですから。

(編集者 K.Y)